

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2021 年度
氏名	伊奈 千晶	指導教員 (主査)	諏訪 絵里子

論文題目	<b>ASD 困り感を有する大学生の心理的自立の検討 -意欲および抑うつとの関連-</b>
------	---

### 本文概要

**【問題と目的】** 近年増加している発達障害学生の中でも最も人数の多い自閉スペクトラム症（以下、ASD）のある学生（日本学生支援機構，2019）は、特に学業成績が低くなり（佐々木・高橋・竹田，2018）精神的健康度が低くなる傾向があることが示されている（高林・藤井・菅野；2013）。これらの要因として以下のことが指摘されている。まず、より主体性が求められ、構造の少ない大学環境は ASD 特性のある者にとって苦手な環境であること。そして、ASD 学生は大学のニーズを正しく捉え、それに合わせた考え方や行動をとろうとしにくいこと（高橋，2014）。この後者は心理的自立の困難さとして捉えられている。心理的自立は、社会的価値観を踏まえて意思決定・自己をコントロールすることと定義されており（高坂・戸田，2006；山田，2012）、意欲低下やうつなどの不適応とも関連することが明らかになっている（山田，2011）。さて、大学環境が彼らにとって障壁を生じさせやすいことが不適応を引き起こすならば、合理的配慮などにより環境を調整することが必要である。一方、心理的自立という個人の認識や考え方に困難さがあるならば、環境調整以外の教育的支援がより有効になるといえるであろう。しかし、ASD 特性から生じる障壁、心理的自立の困難さ、大学での適応との関係性は実証的に明らかにされてはいない。そこで本研究では、一般大学生の ASD 的な特性から生じる大学で困難を感じる程度（以下、ASD 困り感）に着目し、それらが心理的自立や意欲低下および抑うつとどのように関係するのかを媒介分析を用いて明らかにすることで、適切な支援方法を検討することを目的とした。

**【方法】** 首都圏の私立大学生 105 名（男性 46 名，女性 59 名，平均年齢 20.11 歳）に対し、無記名によるアンケート調査を行った。アンケートは①フェイスシート（年齢，性別，学年），②「自閉症スペクトラム障害的困り感尺度大学生版（ASD 困り感尺度）」（山本・高橋，2009），③「心理的自立尺度」（高坂・戸田，2005），④「意欲低下尺度」（下山，1995），⑤「うつ病の疫学研究用の自己評定尺度」（島・鹿野・北村・浅井，1985）によって構成され、オンラインで実施した。

**【結果と考察】** ASD 困り感が心理的自立を介して意欲低下や抑うつに影響を与えるのか、男女別に媒介分析を行った。その結果、意欲低下については男女ともに ASD 困り感から心理的自立を媒介した影響のみが示された。つまり、ASD 特性によって大学生活で躓き困っている学生は、大学の価値観を理解したり自分自身を客観視することが難しく、そのために意欲が下がると考えられる。つまり、ASD 特性を持っていても大学や自分自身について正しく理解し、それに合わせて必要な考え方や行動を実践していこうと考えることができれば、大学への意欲は下がりにくくなることが示唆された。一方、抑うつへは、ASD 困り感から心理的自立を媒介した影響も示されたが、ASD 困り感そのものが直接抑うつに与える影響の方が大きいことが示された。つまり、心理的に自立できていないことよりも、大学という環境の中で ASD 特性によって生じるつまづきそのものがストレスとなり、精神的健康面を阻害すると考えられた。よって、抑うつを防ぐためには環境調整がより重要になるといえる。さらに、男子の方が ASD 困り感から抑うつへ与える影響が大きいことが示された。ASD は表出される症状に性差があることが指摘されており、男性の方が認知機能が高くこだわりが強いこと、女性の方が社会性が高いことが示されている（大村，2020；Mandy，2021）。このことが、男子の方が抑うつにつながりやすい要因になるのではないかと推察された。本研究から、ASD 特性のある学生の精神的健康面の悪化を防ぐことに対しては環境調整がより重要になることが実証的に示されたといえる。一方、環境の配慮だけでは意欲を維持しにくい、ASD 特性のある者には心理教育や個別の教育的支援などを行うことで大学へのモチベーションを上げることができると考えられた。